

外国語学習者の習熟度を最も予測する要因は何か

—重回帰分析を用いて—

大岩昌子

名古屋外国語大学

0. はじめに

第2言語習得研究では、同じ学習環境にありながら学習効果に差をもたらすものとして、個人差要因が大きな役割を果たしていることが明らかになっている (Dörnyei 2005)。Larsen-Freeman & Long (1991)はこの個人差要因として、年齢、態度／動機づけなどの社会心理学的要因、性格、認知スタイル、学習ストラテジーなどを挙げている。この中から例えば、拙稿 (2008)では学習者が動機づけを失う要因に焦点を当て、フランス語を主専攻とする学習者を対象に、学習の習熟度別にその実態および課題を検討した。また、拙稿 (2006)では、フランス語学習者において、フランス語の RST (リーディングスパンテスト) と学習ストラテジーに関わるアンケート調査を行い、その得点と学習者が用いる学習ストラテジーとが、フランス語の習熟度とどのように関わるか検討した。これらの研究を基に、本研究はメタ認知ストラテジー、補償ストラテジーなどの学習ストラテジー、日本語の RST 得点、フランス語の RST 得点、学習の動機づけ等を説明変数として重回帰分析を行うことで、どの変数がフランス語の習熟度をより予測するかを検討し、大学における初修言語学習に大きく関わる要因を統計的に明らかにすることを目的とする。

I. 実験対象と方法

被験者としてフランス語を主専攻とする大学の2年次生 62名を設定した。被験者等は一週間に7コマ (6コマ 90分、1コマ 45分) のフランス語の授業を受講、うち4コマはフランス人教員、3コマは日本人教員によるものである。2年次 II 期末におけるリスニング、文法、読解に関する定期試験ではないフランス語の試験の得点 (平均 61.242/100, SD11.888) を従属変数 (目的変数) とした。以下は説明変数として設

定した項目である。

1) リーディングスパンテスト (RST)

ワーキングメモリ・スパンを測定するテストのうち

言語性ワーキングメモリを測定するものとして広く用いられているのが、リーディングスパンテスト (RST) である。本実験では被験者らを個別に呼び、5つのフランス語文を一つずつ見せ、音読させると同時に文末の単語を記憶させ、5つ目の文が終わったところで、ターゲット単語を系列再生させる方法をとった。これらのフランス語文は1年次にすでに学習した語彙のみが含まれ、また構造も簡単な者である。日本語に関して同様の手法により行った。ターゲット言語は文中に定めた。

2) 学習ストラテジー調査

学習ストラテジーにはさまざまな学習法が含まれるが、Oxford(1990)により、言語に直接働きかける「直接ストラテジー」と学習を間接的に支える「間接ストラテジー」の2つに大きく分類、さらに細分化され、62種類のストラテジーが提案されている。ここでは筆者が選定、記憶、認知、補償、メタ認知、情意、社会的ストラテジーに関する15項目によりアンケート調査表を作成、被験者に一斉に配布、回収した。各設問は4段階の回答方式のため、1～4点で得点化、それを各ストラテジー別に加算し、平均点を得た。

3) 動機づけ

Dörnyei(1998)で挙げられた動機づけに関わる要因の中から、筆者が作成したもので、本研究では、いかなる動機づけであっても、アンケート調査の時点で、動機があるかないかのみを説明変数として設定した。カテゴリ変数であるが、連続変数に統計上置き換えた。

II. 結果と考察

今回設定した変数の中でフランス語の習熟度を説明するのに最も有効と推察されるのは学習ストラテジーの中のメタ認知ストラテジーとフランス語の RST 得点である ($p<.0001$)。学習ストラテジーに関する拙稿(2006)で、成績の上位グループは下位グループと比較してメタ認知ストラテジーをより活用していることが明らかになっている。本研究ではこの結果を追認したとともに、メタ認知ストラテジーが他の個人的要因と比較しても大きな役割を果たすことがわかった。フランス語の RST 得点が説明変数として有効であると認められる一方、日本語の RST 得点には全く傾向が認められない($P=.3928$)。日本語の RST 得点の平均は 3.5、フランス語は 2.484 であり、日本語の得点に比較してフランス語では得点有意に低い($p<.0001$)。荻阪 (2000) によれば、バイリンガルや習得が進んだ言語では、第 1 言語との間では RST 得点に相関が認められるが、習得が進んでいない言語での RST 得点は、第 1 言語の RST 得点と相関しないという結果が得られている。これに従えば、今回の学習者が学習途上であるということは明らかである。一方で重回帰分析の結果はフランス語の得点の方はフランス語の習熟度の説明変数として有効であることが示していることから、発展途上の学習者においてもフランス語の習熟度を知る手段としてフランス語の RST 得点は指標となりえることができよう。次に説明変数として有効なのは動機づけである($p=.028$)。拙稿 (2008) ではフランス語を主専攻とする学習者の約 9 割が学習の過程において、動機づけを喪失したことがあるという結果が得られており、これは一般の外国語学習者にも共通して見られる現象であろう。従ってこうした学習者の動機づけを回復させなければ、学習が進まないということは容易に推察できるのである。次は補償ストラテジーである($p=.0116$)。これは負の説明変数であり、すなわち学習の進まない学習者は言語によるコミュニケーションがままならないことから、身振りなどの補償ストラテジーを活用するのも自然なことであろう。

III. おわりに

本研究はメタ認知ストラテジー、補償ストラテジーなどの学習ストラテジー、日本語の RST 得点、フランス語の RST 得点、学習の動機づけ等を説明変数として重回帰分析を行うことで、どの変数がフランス語の習熟度をより予測するかを検討し、大学における初修言語学習に大きく関わる要因を統計的に明らかにすることを目的とした。説明順序はメタ認知ストラテジー、フランス語の RST 得点、動機づけという結果が得られた。

参考文献

- Oxford, R.(1990) *Language Learning Strategies*. Newbury House.
- 荻阪直行(2000)『脳とワーキングメモリ』京都大学学術出版会。
- Dörnyei, Z. (1998). Demotivation in foreign language learning. Paper presented at the TESOL '98 Congress, Seattle, WA.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ:Lawrence Erlbaum Associates.
- 大岩昌子(2006).「ワーキングメモリと学習ストラテジーからみたフランス語学習者の習熟度別グループの特質」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』31, 17-26.
- 大岩昌子(2008).「フランス語学習者が学習意欲を失う要因を探る－習熟度別考察－」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』3391-103.
- 廣森友人(2006).『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版。

表 1：重回帰分析の結果

	回帰係数	標準誤差	標準回帰係数	t値	p値
切片	-26.691	18.801	-26.691	-1.420	.1617
記憶ストラテジー	-3.901	2.462	-.169	-1.585	.1191
認知ストラテジー	-.691	2.196	-.022	-.315	.7542
メタ認知ストラテジー	38.053	5.012	1.271	7.592	<.0001
補償ストラテジー	-5.711	2.181	-.432	-2.618	.0116
社会的ストラテジー	.914	1.214	.054	.753	.4549
情意ストラテジー	1.663	1.499	.119	1.110	.2723
動機	-10.573	4.679	-.446	-2.260	.0280
RST(フランス語)	4.259	.929	.348	4.587	<.0001
RST(日本語)	1.048	1.216	.090	.862	.3928